

第6講：世界の難渋に心を寄せて—いま求められる共感の力—

はじめに

貧困や自然災害、紛争や難民、環境問題など、国家の枠組みだけでは解決できない地球規模の難題に直面し、国境を超えた市民による協力・支援活動の必要性が叫ばれて久しい。こうした国際社会の動きの中で、世界の難渋に心を寄せて、ひとの難渋を我が事として地道に支援活動を続ける人たちが多くいる。

その中でも私がとくに注目しているのは、宗教組織が母体となって誕生し、現在も宗教的な価値観や倫理観にもとづいて活動を推進する「宗教 NGO」と呼ばれる組織である。私たちがイメージしがちな「国際舞台で躍動する NGO」といった表の顔とは別に、布教や広報を目的とすることなく信者自らの信仰実践として、地味ながらも息の長い支援活動が続けられているのである。たとえば日本の NGO の草分け的存在である日本キリスト教海外医療協力会 (JOCS) では、長年にわたり「使用済み切手運動」を推進し、海外に派遣される医療関係者をサポートする。同様の動きとしては、仏教系 NGO であるシャンティ国際ボランティア会 (SVA) の「絵本を届ける運動」や、立正佼成会の「一食を捧げる運動」などを挙げることができるだろう。

また天理教も 1960 年代コンゴでの海外医療活動を皮切りに、現在にいたるまでさまざまな国際支援活動を展開してきており、近年ではその活動の裾野が教区や教会、信者個人へと広がりにつつある。

では、彼らを突き動かすものは何なのか。そのエネルギーはどこから生じているのだろうか。本講座では、人々の心に通底すると思われる共感の力に着目して、「一れつきょうだい」の教えに基づくたすけあいの意味について改めて考えてみた。

支援活動に通底する「共感」

共感とは一般的に「他人の体験する感情や心的状態、あるいは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること」(『広辞苑』)と定義される。すでに人口に膾炙されているが、じつは戦後に定着した「新語」だという。このたびの東日本大震災以降、「いま被災地に同じ思いを抱き、共感する人々がソーシャルメディア上でゆるやかに連帯している。『共感縁』が生まれつつある」とか、「被災地と我々との距離感を埋めることができるのは、『共感の力』ではないか」といったコメントが各方面から寄せられ、改めて人と人の絆を捉え直すうえでキーワードになったように思う。

そもそも人間は一人では生きられない社会的存在であり、人間関係の根本にあるのが共感性なのである。その共感には、他者の表情を見てとっさにその人の気持ちを察知する「感覚的共感」と、話を聞いて他者の状況を詳しく知ったうえで相手に共感を覚える「知的共感」の二つの次元があり、いずれも「ミラーニューロン」と称される脳神経システムと深い関係があることが、専門家の研究で明らかになっている。

つまり、国籍や人種、文化の違いがあろうとも、人間には本来、他者の痛みや難渋を我が事として感じることでできる潜在的な「共感力」が備わっているということだ。そしてこの力こそが、国の内外を問わず支援活動に携わる人達の、エネルギーの淵源になっているのではないかと思うのである。

共感からたすけ合いの心へ

原典に「共感」に関連するお言葉を求めてみると、「たんへこのみちすじのよふたいハ みなハが事とをもてしやんせ」(ふ 10 : 104) や、「人の事やない、皆めんへ^への事やで。めんへが痛み悩みと思えば、放つて置く事は出来ようまい」(さ 29・5・21) などがある。

こうしたお言葉を通して教祖は、人々の「共感力」をもとに、たすけ合いの心を喚起するよう促しくださっていると思えてならない。では、なぜ「みなハが事とをもてしやん」しなければならないのか。それはもちろん、私たちが親神により創造され、同じご守護を受けて、生かされて生きている「一れつきょうだい」だからである。「おさしづ」では、「世界中人間は一列兄弟。一列は神の子供や」(20・12・1ホ) や、「同じ五本指の如く、兄弟の中なら、どの指噛んでも身に応えるやろ」(32・12・27) のように、「兄弟」という言葉で繰り返し人間関係のありようを論され、その数は実に 268 件にもものぼる(辻井正和『おさしづ用語の新研究』)。

しかしながら、皆一名一人、心は違う。「高山にくらしているもたにそこに くらしているもをなしたまひい」「それしらすみなにんげんの心でわ なんとたかびくあるともふて」(ふ 13 : 45・47) や、「同じ兄弟の中に、合うの合わんのと言うようでは、道を捨ててほかしてうたも同じ事やで」(さ 32・5・14) などのお言葉からも悟れるように、私たちは差別や無関心、不足の心などを持ち合わせているからである。

では、兄弟とはどうあるべきか。「おさしづ」には「兄弟心が合わん者もある。皆それへ心より合わせてくれ。聞いたる者より合わせてやれ」(28・5・19)、「心と心の理を合わせるは兄弟の道」(35・7・20) などと教示されている。

これらのお言葉からは、兄弟とはいえ、労せずにはわかり合える、心を通じ合えるというわけではないこと。そして、一れつきょうだいの境地に限りなく近づくには、気づいた者から「心の理」を合わせる大切であると分かる。さらに「世界は神のからだ身の内かきもの、同じかりものならば同じ兄弟」(明治 21 年頃 補) や、「かりもの分かれば、助け合いの心浮かむへ」(33・3・22ホ) とあるように、「かきもの・かりもの」の理を心に治め、互いに誠の心を捧げることが肝要であると言えよう。

おわりに

現在、震災からの復興をはじめ、長期的に取り組むべき問題があまりにも多いことから、無力感に苛まれ、時にはたすけ合いの心を失いかけてしまうことがあるかもしれない。そんなときこそ、私たちようぼくには、単なる感覚的共感や知的共感という次元を止揚した、一れつきょうだいの教えに基づく「信仰的共感」の力を発揮することが求められているのではないか。その思いが日々のおつとめに込める祈りと、地道なたすけ合い活動の力となるだろう。そして「道は何程遠く思えども、心というものは日々、心日々届く」(さ 20・10・12) とあるように、やがては親神様も私たちの日々のつとめ方と伏せ込んだ誠真実をお受け取りくださり、世界たすけの上にお働きくださるものと信じる。